

注記：本論考は日本国際問題研究所領土・主権・歴史センター東アジア史研究会委員の見解であり、日本国際問題研究所の見解を代表するものではありません。

学術外交を通じたタイ中関係の再定義

Sitthitph Eakshitpong 2021. *Khien jin hai pen thai* (Describing Chinese as Thai), (Bangkok: Matichon) を読む

青木（岡部） まき

(アジア経済研究所)

タイの対中政策、対中認識についてはパッタジット（2020）が1970年代のタイ中国交正常化の背景を描き出すなど近年研究が進んでいる。そうした状況にあって、本書は1940年代から70年代におけるタイ華人研究を題材に、タイ、アメリカ、中国の研究者間交流と「学術外交」のなかで「タイ人 khon thai」「華人／中華系タイ人 khon jin/khon thai cheua sai jin」研究と現実のタイ社会に対する認識枠組みが形成、変遷してきた様子を描く学術書である。

筆者の Sittitph Eaksittipong は、シンガポール大学歴史学部で Bruce Lockhart 教授の下で博士号を取得し、2016年から1年間を Harvard-Yenching Institute 研究員としてすごしたのち、2018年から国立チェンマイ大学人文学部歴史学科で准教授としてタイ・中関係史を教える。本書はシンガポール国立大学史学部での博士論文「Textualizing the “Chinese of Thailand”: Politics, Knowledge, and the Chinese in Thailand during the Cold War」を加筆修正しタイ語で出版したものであり、タイ国内で2021年に刊行され話題となった。ことにタイの読者の関心を集めたのは、本書がタイの中華系研究の発展を戦後のタイを取り囲む国際関係、より詳しくは冷戦と米中対立の文脈に置き直し、そこから中華系タイ人の社会的位置づけとタイの対中認識が、「タイらしさ」の模索と形成の過程と表裏一体となって形成されてきた様子を描いた点にある。

1940年代後半、アメリカのタイへの接近政策の一環として、スキナーなどアメリカの中国研究者がタイの農村を中心に組織的調査を行い、中華系との比較からタイ社会を分析した。本書はこうした「アメリカ製タイ研究」がタイ国内で再生産される様子から説き起こし、1950年代から60年代にかけて、タイ・米教育協力の下でタイの大学・学術研究体制の「現代化」が進み、中華系タイ人の研究を通じて「中華系タイ人がタイで平和的に生き延びる唯一の方策＝同化」というパラダイムが再生産されたことを確認する。1970年代に入り、米中和解と国内の民主化要求運動が起きると、歴史学者の Nithi Iaosriwong らを中心に地方史、政治経済学派の歴史修正運動が起きる。本書は、そのなかで歴史学者らが中華系を「タイに住む中華系」から「中華系タイ人」(khonthai cheua sai jin) へと読み替え、スキナーらの「同化パラダイム」をアメリカの知的侵略の産物として排除していった動きを「知的ナショナリズム」と定義する。終章では、タイ中国交正常化に伴い、タイ国内での「知的ナショナリズム」を歴史学者が、中華人民共和国内におけるタイ研究のナショナリスト的動機に無自覚なまま、中国の華人研究と連携しながら中華系タイ人に関する研究を蓄積した様子を辿る。中国側は、中国南部から東南アジアにかけて分布するタイ語族が中国王朝の地方政権を形成したという見方を政治的意図をもってタイ側に提示し、タイ側はそれを受け入れて、中国本土の中国人とは異なる政治集団として中華系タイ人を捉え、中華系タイ人をタイ国家の一員として扱う歴史観が形成されたところで、本書は考察を結ぶ。

本書の内容から看取できるのは、アメリカの知的影響から逃れることを目指し始まったタイの知的ナショナリズムが、アメリカから離れようとするほど中国のナショナリスティックな歴史観に巻き込まれるという構図である。同根でありながら別の国家を形成し、中央・地方という関係のアナロジーで理解されるタイ中

関係像については、近年タイ国内における政治体制の保守・権威主義化とそれへの対抗という形で続く政治対立のなかで見直されつつある。その一方、本書を通読する限り「中国・中華」(jin)として考察の対象となるのは中華人民共和国であり、中華民国・台湾との関係についてはほとんど言及されていない。これは本書の考察対象が筆者自身も属する「知的ナショナリズム」学派に限定されているという分析対象設定の問題もあろうが、タイの「中国」研究が冷戦のなかのアメリカ、タイと中華人民共和国との関係に関心を寄せるあまり、戦後の台湾との関係については等閑視してきたことの表れでもあると考えられる。

本書は、タイの中国研究が単なる外国研究に留まらず、自国社会を内在的に把握する試みであり、さらにアイデンティティにかかわる営為であることを示しており、さらにタイ・台湾関係の実態検証という研究上の空白も示唆している。